

Title	生きているはだか
Author(s)	大北, 全俊; 栗田, 隆子; 高橋, 綾
Citation	臨床哲学のメチエ. 3 P.24-P.26
Issue Date	1999
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4735
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

生きているはだか

——LOVE'S BODY 展にて私たちが見たもの——

大北全俊 栗田隆子 高橋綾

6/17日(木)サントリーミュージアムで行われていたLOVE'S BODY展に行った。LOVE'S BODY展は、メッセージが明確でわかりやすい写真展であった。

そのメッセージとは、ヌード写真がその「表現も評価も、男性の目で決定されてきた歴史」を見直し、その歴史において繰り返し表現されてきた「男性が理想とする女性の身体、若く均整のとれた健康的な」身体とはことなる身体をヌード写真を通して示す、ということであった。そうした明確なメッセージのもとで、男性主導のまなざしにおいては「他者」とされてきた女性の視点、ないしゲイそしてレズビアン視点からとられたヌード写真が盛り込まれていた。たとえばロバート・メイプルソープが恋人のパティスミスを撮影した写真や、ゲイのカップルがお互いを撮影した写真などが、そのメッセージに沿って展示されていた。しかし、LOVE'S BODY展全体のまとまりのよさが、展覧会全体を一個の「作品」として、生活とは少し距離のあるように感じた。被写体として西洋人が多いこと、白黒の写真が多いこと、特定の宗教的背景に訴えること、どれも私たちには見慣れない光景のような気がした。強烈な写真なのだけどもあくまで完成され

た作品であって、日常の生々しさがあまり感じられなかった。だから、それらの写真が街中にポスターで張られていても、あくまで「作品」であって抵抗はない。しかし、そのなかで、TOKYO GIRLSだけは私たちの日常に近く、生々しい。だから、もし街中にその写真を張ったなら、その生々しさのためにきっとドキッとするとするだろう。でも、その写真は抵抗感や不安を感じさせるものというよりも、むしろどこか安心させてくれるものを感じた。

TOKYO GIRLS(神蔵美子撮影)と題された一連の写真は、平均して二十代くらいの、風俗で働く女性たちをモデルにしたヌード写真である。写真展の中でも、ひときわ大きなフレームに明るいカラーの写真で、モデルは思い思いに楽なポーズをとっている。写真に添えられたプロフィールによると、写真家は女性で、風俗で働く女の子一人一人に興味を持ち、その子たちのポートレートを撮ろうと考え、取材をしながら撮影をしたらしい。「その時そこには、男性の視線を意識したセクシーポーズや、営業的な媚や笑いをすべて脱いだ女の子がいた。」

TOKYO GIRLSは展覧会の趣旨に添った写真ではあるのだが、その趣旨には納まりきら

ない。この「納まらなさ」とはなにか。この写真展のメッセージは「男性主導のヌードではないヌード」、言い換えれば「ポルノではないヌード」を提示することであった。しかし、TOKYO GIRLSのヌードはポルノVS非ポルノという枠組みを越えている、あるいはそんなことを気にもとめずにあっけらかんとしている。

週刊誌のグラビアのように、いわゆるヌードというのは顔とヌードになった体が地続きになっている。服を着ている人が服を「脱いだ」というよりは、頭からヌードを「着ている」。それにひきかえ、TOKYO GIRLSの裸は、まるで銭湯から抜け出てきたような、「普通」の裸だった。それがかえって「ドキッ」とさせられる。普段、服を着ている見慣れた人が服を脱いだような、銭湯で裸になっている人がいきなり街なかに出ているような印象だった。背景も陰影もないその写真には、ただその裸がそこにあるという明るさがいっぱい広がっていた。

生活の中で他人の裸を見ること、特に生活の中で女性の裸を見ることは意外とないように思う。ただ銭湯に足を運ぶだけでもすぐに分かることだが、いろんな体がある。太ったからだ、やせたからだ、年老いたからだ、若々しいからだ、まさに人それぞれである。しかし、これだけ女性のヌードが氾濫しているのに、あるいは氾濫しているからこそ、同性である女性の目から、その様々な女の人の裸は遠ざ

けられる。そして、つい「着ぐるみのヌード」と比べながら、自分の体について語ってしまう。TOKYO GIRLSを見たとき感じた安心感は、ただいろんな体があるということからくるのかもしれない。「着ぐるみのヌード」に体を語る基準を独占されるのに対して、TOKYO GIRLSでは、いろんな体と比べることを「遊んでいる」うちに、自分の体を取り戻してい

る。「いろんな体があるよね」「この人の体ぶよぶよしている」「へそピアスかわいいよね、私もしようかな」「意外とこの人人気あるんじゃない」など、気軽に人の体について語るうちに、女の人はい自分の体についても気軽に語れる、あるいは語らなくてすむ「あっけらかんとした」感覚を取り戻す。

ところで、男の人もこの写真に安心感を感じるだろうか。もし安心感を感じるとしてもそれは女の人と同じものか、もし感じないとしたら、むしろ不快感を感じると

したらそれはなぜなのか。ただここでは、そこにある裸は、男性のまなざしを許さないという裸でもないが、男性のまなざしがなくてもよい「気軽な」裸だということは言えそうだ。

じつは、女の人だけでなく、男の人もそうした「気軽な」裸への感覚からは遠ざけられているのではないか。既存のポルノから排除されているのは、「他者」のまなざしではなく、こうした「はだか」にたいする「あっけらかんとした」感覚なのかもしれない。食事をし、仕事をし、おしゃべりをし、そしてセックスもす

「着ぐるみのヌード」と「普通のはだか」

るという私たちの「普通のはだか」がそこからは抜け落ちている。その点で、TOKYO GIRLSのはだかの女の子たちの何もない背景には、キッチンでも、お風呂でも、恋人の待つベッドでもなんでもあてはまる。セックスしていてもよいけど、セックスしていないというのもありなのである。生活しているはだか、

という気楽さ。それはLOVE 'SBODY展が提示したメッセージを超えるものだったのではないだろうか？

(おおきたたけとしくりたりゅうこたかはしあや
博士前期・後期課程)

crème の誕生

栗山愛以

研究室のドアの上、極彩色を放つわがcrèmeのポスターにお気づきだろうか。crèmeには、いわゆる「クリーム」のほかに、「えりぬき、精髓」そして「いかれた」という意味がある。これこそまさに、哲学でファッションをやろうとしている一見いかれたわれわれにふさわしい。

小林昌廣は『臨床する芸術学』のなかで、ファッションとは、それを身にまとう人間にとってみれば「実用芸術」であり、徹底して「見る」側に立つ人間にとってみれば「純粋芸術」であると言っている。また、医学に身を置いているというその立場から、すべての患者が自らの身体に対する「専門家」であると考えが、「実用芸術」と言われるように、みずからのファッションに対しても、われわれは

「専門家」なのではあるまいか。そして、「純粋芸術」としてそれに距離をおくこともできる。一方思考するということも、誰もがやっていることであり、誰もが「専門家」であると言える。このことをなおざりにしがちな哲学の現状をいましめるべく「臨床哲学」をたちあげたとするならば、同じような構図をわりあい明らかなかたちでもつファッションは、この場で論ずるに値するのではないだろうか。

このようにファッションの「実用芸術」的要素と「純粋芸術」的要素をくみつくすためには、バルトが現実の衣服の方だけに向いていると言う社会学、イメージを認識させようとすると言う記号学ではことたりない。こうしてわれわれは、その中間的切り口を濃くしつこく模索しながら、臨床哲学の精髓となるべく、日々邁進しているというわけなのである。

(くりやまいとい 博士前期課程)